

VII-1

当科における多発性骨髄腫の治療成績

三木浩和¹、尾崎修治²、田中 修¹、藤井志朗¹、中村信元¹、三原 愛¹、賀川久美子¹、浅野 仁¹、竹内恭子¹、矢田健一郎¹、橋本年弘¹、安倍正博¹、松本俊夫¹

徳島大学大学院生体情報内科学¹、徳島大学病院輸血部²

【背景】多発性骨髄腫は難治性疾患であり、再発後の治療として新規治療薬 (thalidomide, bortezomib) が試みられているが、その長期的な治療効果は確立していない。今回当科で経験した多発性骨髄腫患者の予後について後方視的に検討した。

【対象・方法】1989-2006 年に加療した多発性骨髄腫 114 例 (男性 58 例, 女性 56 例)。初診時年齢 34-85 歳 (中央値 62 歳)。臨床病期 A 18 例, B 3 例, A 76 例, B 17 例。初回治療としては MP または VAD を行い、28 例に対しては自家末梢血幹細胞移植を施行した。また化学療法抵抗例 (11 例) や移植後の再発例 (13 例) には新規治療薬を使用した。【結果】全症例の初回治療からの 5 年生存率は 38.6% であり、自家移植群は化学療法単独群と比較して有意に優れていた (68.7% vs 27.6%, logrank : p=0.001)。自家移植群のうち 18 例は再発し、無再発生存期間は 3-37 か月 (中央値 13 か月) であったが、再発後の治療内容による生存率に有意差はなかった。一方、新規治療薬使用群についても非使用群と比較して生存率に有意差はなかった。Cox 比例ハザードを用いた多変量解析では、自家移植群、血清 2MG 値 (< 3.5 mg/L) が予後良好因子であった。

【結論】多発性骨髄腫に対する自家末梢血幹細胞移植は、安全かつ有効であるが、再発例に対する有効な治療法は確立されておらず、更なる検討が望まれる。